

井 尻 B 遺 跡 9

— 第9・10次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第678集

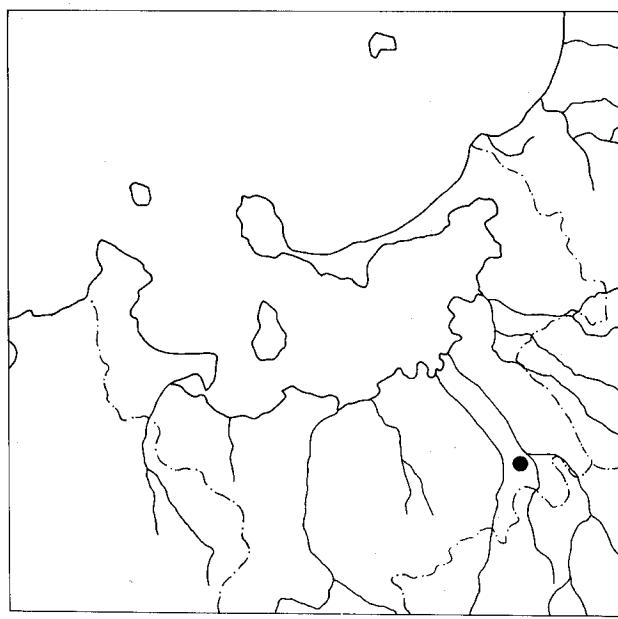
2001

福岡市教育委員会

井 尻 B 遺 跡 9

—第9・10次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第678集



調査番号 遺跡略号

9次調査	9745	IZB-9
10次調査	9758	IZB-10

2001

福岡市教育委員会

序

福岡の南部に位置する南区井尻地区は、古代の奴国の中核部である須玖岡本遺跡に隣接しています。各種の開発事業による発掘調査によって、その中心集落としての様相が徐々に明らかになりつつあるところです。

本書はそうした調査のひとつで、井尻1丁目、井尻5丁目において、住宅建設に先立って行った発掘調査の成果報告書です。調査の結果弥生時代を中心に各種の遺構、遺物が見つかりました。特に奴国成立期の環濠が見つかったことは、今後の研究に大きな資料を提供したといえるでしょう。発掘調査から整理、報告に至るまでご理解とご協力をいただいた地権者をはじめとする多くの関係者の方々に対し、心からの感謝をいたしますとともに、本書が文化財に対する認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに存じます。

平成13年3月15日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が、1997年度に住宅建設に先立ち、国庫補助事業として福岡市南区井尻B遺跡内で行った第9次・10次調査の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本書ではこの番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、溝1、土壙2のように記述する。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は宮井のほか、当課職員井上繩子の協力を得た。また製図は宮井のほか林由紀子の協力を得た。
5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井が作成した。
6. 本書使用の写真は宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の番号は収蔵時の登録番号に一致する。
8. 本調査にかかる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
9. 本書の執筆、編集は宮井が行った。

本文目次

第9次調査

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 調査の記録	
1. 検出遺構	2
2. 出土遺物	2
3. 小結	3

第10次調査

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	5
2. 調査体制	5
II. 調査の記録	
1. 検出遺構	7
2. 出土遺物	8
3. 小結	16

挿図目次

(9次調査)

調査地点図	中扉
Fig. 1 調査区位置図 (1:200)	1
Fig. 2 遺構配置図 (1:100)	2
Fig. 3 住居跡1・出土遺物実測図 (1:60、1:3、1:2)	3

(10次調査)

調査地点図	中扉
Fig. 4 調査区位置図 (1:200)	5
Fig. 5 遺構配置図 (1:100)	6
Fig. 6 溝1実測図 (1:80)	8
Fig. 7 溝2、土壤3、土壤4実測図 (1:80、1:40)	9
Fig. 8 掘立柱建物実測図 (1:80)	10
Fig. 9 出土遺物実測図1 (1:3)	11
Fig. 10 出土遺物実測図2 (1:3)	12
Fig. 11 出土遺物実測図3 (1:3)	13
Fig. 12 出土遺物実測図4 (1:4、1:3)	14
Fig. 13 出土遺物実測図5 (1:4、1:3)	15

図 版 目 次

(9次調査)

PL. 1 (1) 住居跡1 (東から)

(2) 北半区全景 (南から)

PL. 2 (1) 堀立柱建物 (東から)

(2) 南半区全景 (北から)

(10次調査)

PL. 3 (1) 溝2 (南から)

(2) 全景 (西から)

PL. 4 (1) 溝2 土層 (北から)

(2) 土壌3 (西から)

PL. 5 (1) 堀立柱建物1、2 (南から)

(2) 堀立柱建物1 (西から)

PL. 6 (1) 土壌4 (西から)

(2) 溝1 (西から)

PL. 7 (1) 溝1 北壁土層 (南から)

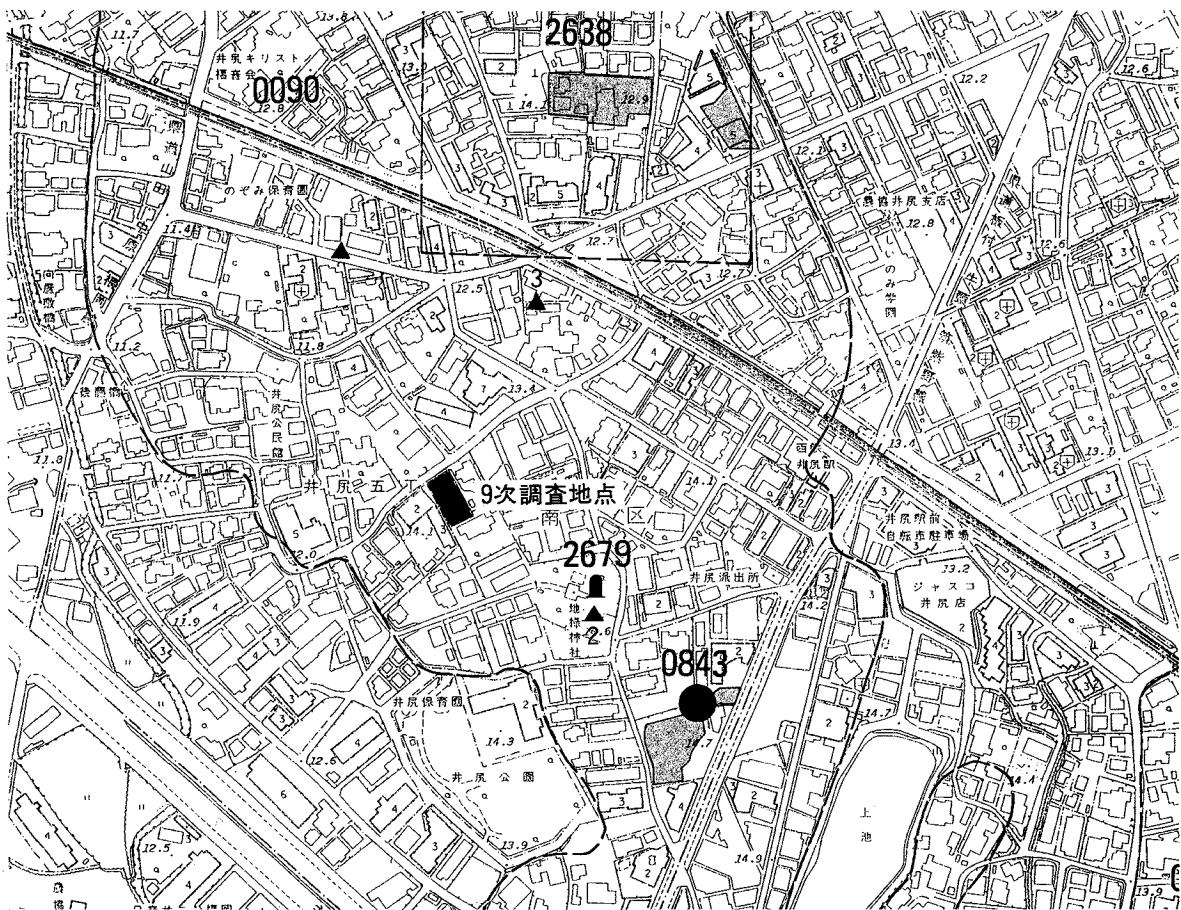
(2) 溝1 東壁土層 (西から)

PL. 8 (1) 門状遺構・堀立柱建物2 (南から)

(2) 柱穴135土層

(3) 柱穴114土層

井尻B遺跡 9次調査



調査地点図

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1997年8月21日付で、三光食品有限会社より、共同住宅建設予定地の埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが提出された。申請地は福岡市の周知の埋蔵文化財包蔵地である井戸B遺跡内に位置していることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて、8月26日に試掘調査を行った。その結果申請地内には遺構、遺物が認められた。この成果をもとに、申請者と埋蔵文化財課との間で保存に関する協議を持ったが、申請地は共同住宅建設が予定されており、基礎による破壊は避けられないため、申請地全体に対して発掘調査による記録保存を図ることになった。調査は国庫補助により、1997年10月6日から10月15日にかけて行った。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（調査年度） 西憲一郎・生田征夫（整理年度）

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（調査年度） 山崎純男（調査年度）

第二係長 山口譲治（調査年度） 力武卓治（整理年度）

調査事務 埋蔵文化財課第1係 河野淳美（調査年度） 文化財整備課 御手洗潔（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 野村道夫 楠林司朗 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 緑川ゆかり 石川洋子

鍋山春子 坂本俊子 穴井加奈子 馬目真吏

整理作業 林由紀子 大石加代子

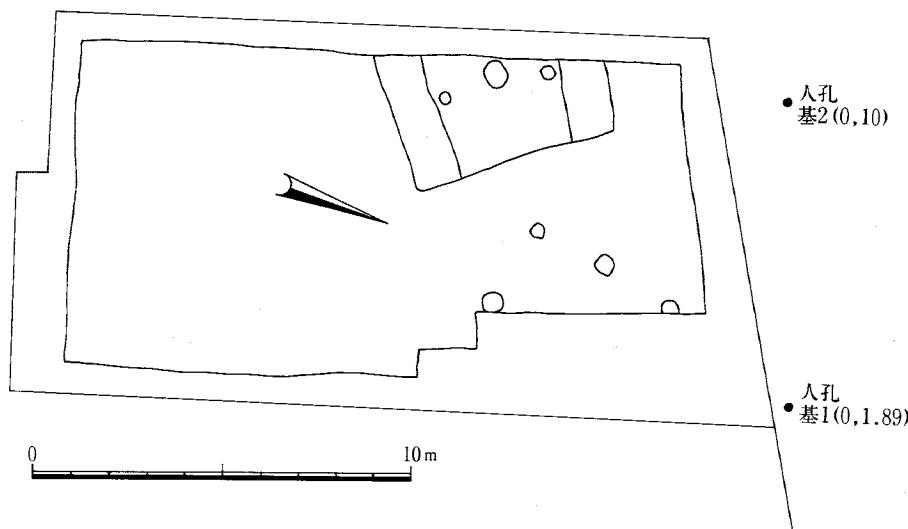


Fig. 1 調査区位置図 (1:200)

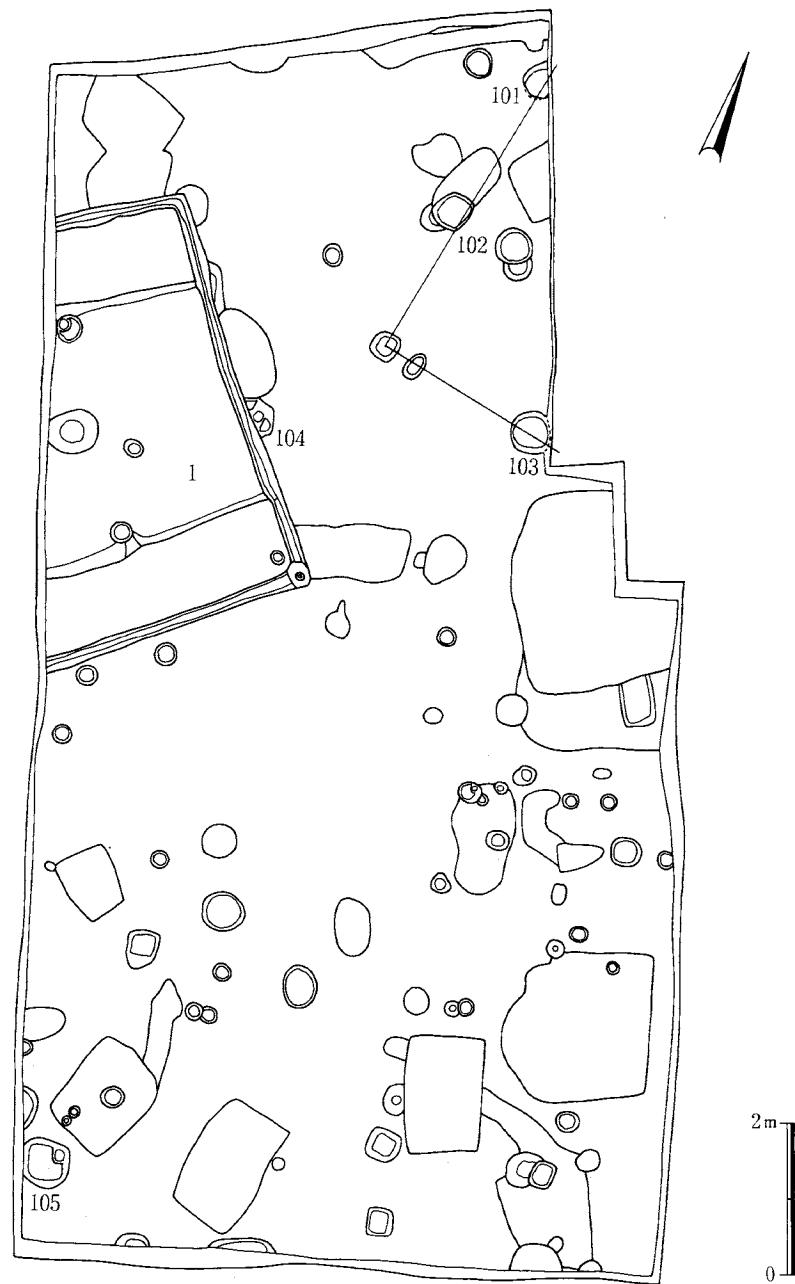


Fig. 2 遺構配置図 (1:100)

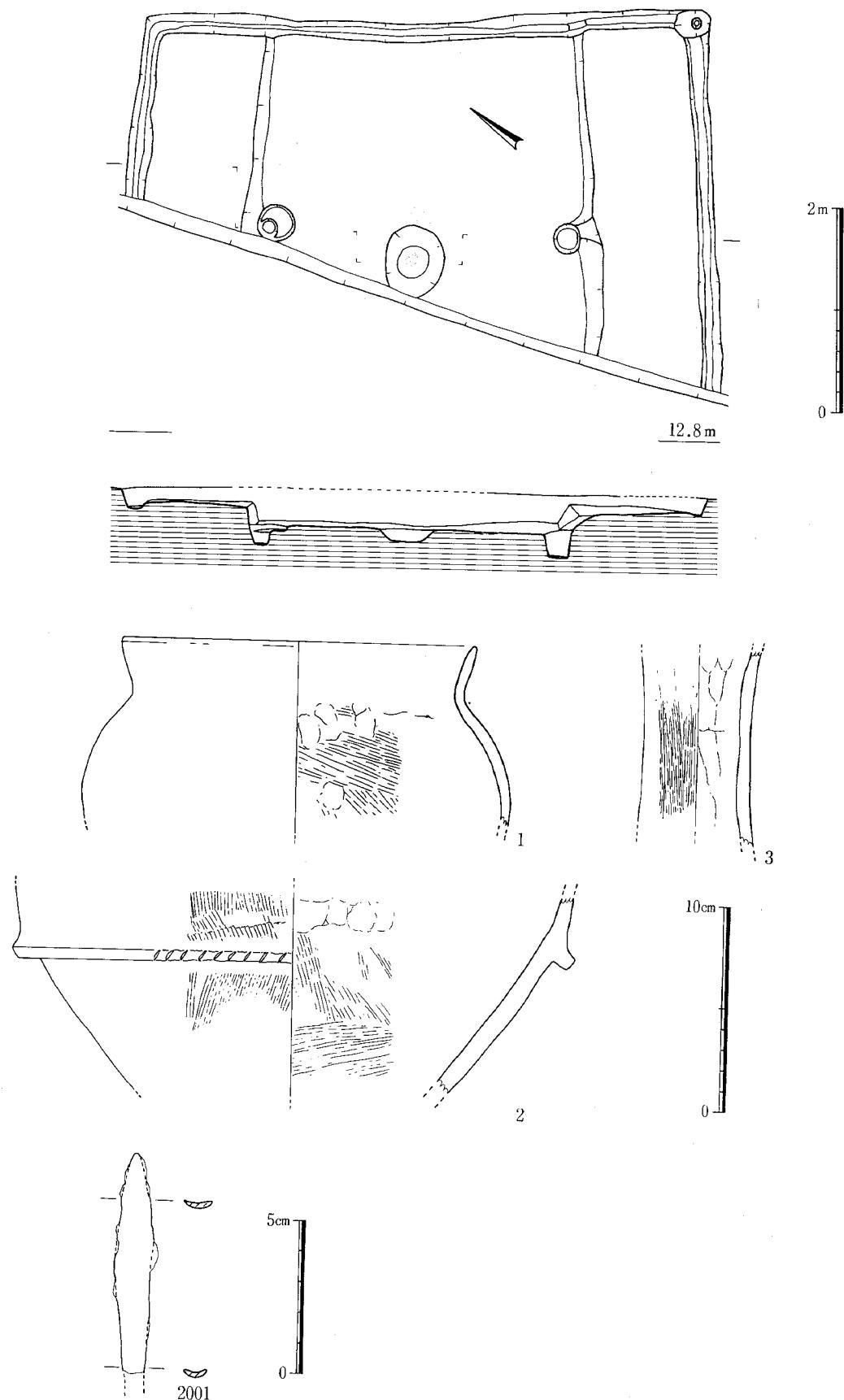


Fig. 3 住居跡1・出土遺物実測図 (1:60、1:3、1:2)

遺跡調査番号	9745	遺跡略号	IZB-9		
遺跡地番	福岡市南区井尻5丁目6-33				
開発面積	188.42m ²	調査対象面積	188.42m ²	調査面積	132.5m ²
調査期間	1997年10月6日～1998年10月15日			分布地図番号	25-0090

II. 調査の記録

1. 検出遺構 (Fig. 2, 3)

井尻B遺跡9次調査では弥生時代後期の住居跡1基のほかはピットが少数検出されたのみである。
住居跡1 (Fig. 3) 調査区西端で検出した。西側が調査区外に出るが、長辺5.8m、短辺4.4mに復元される。短辺側にそれぞれベッド状の高床部を持つ。ベッド状遺構は地山削り出しである。主柱穴は2基で、中央に炉を持つ。周囲に壁溝をめぐらせる。

このほか時期不明の掘立柱建物が1棟検出されている。

2. 出土遺物 (Fig. 3)

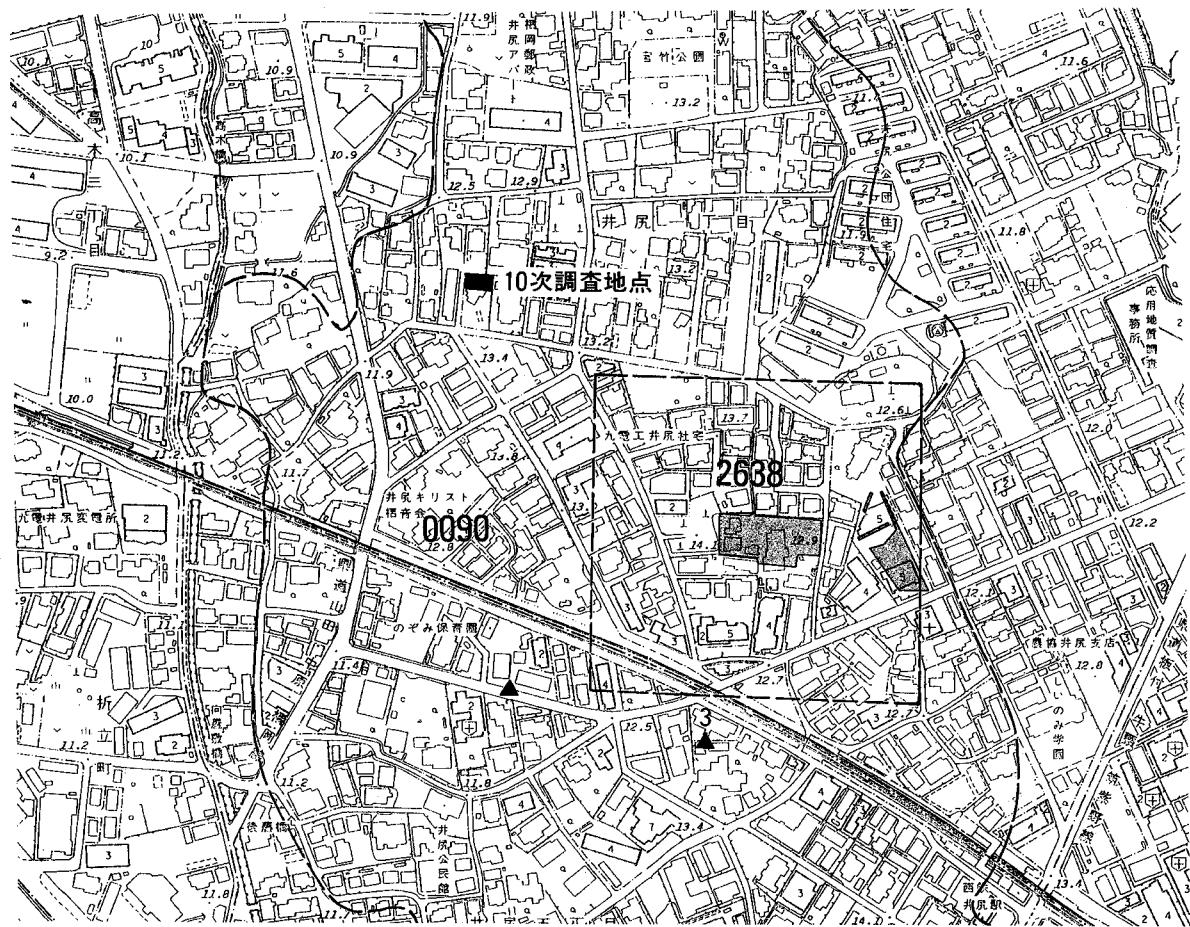
遺構の密度に応じて出土遺物も極めて少ない。総量でもコンテナ2箱程度である。図示した遺物はすべて住居跡1出土のものである。

1は中型の甕である。口縁部は比較的立ち、胴部は張る。内面はハケメ調整であるが、指頭痕が多く見られ、特に口縁部と胴部の接合部付近に顕著である。外面はナデ。2は大形の壺もしくは甕の下半部であるが、底部にかけてのすぼまり方を見ると、壺と考えられる。胴部中位からやや下がった位置に断面方形の突帯をめぐらせる。突帯には刻目を施す。内外面とも目の粗いハケメで、内面の突帯接合の裏面あたりに、指頭痕が顕著である。3は高壺の脚部である。円筒形を呈する。外面はハケメを施し、内面には絞り痕が見られる。4は鉄製鉈である。横断面は七面をなし、反りが強い。

3. 小結

今回の調査は調査面積も狭く、遺構、遺物とも少量であったため、大きな成果を挙げたとはい難いが、調査区周辺を考える上では無視できない成果を収めたといえよう。調査区のすぐ南側には地禄神社があり、ここではかつて広形銅矛の鋳型が出土したといわれているが、現在でも井尻B遺跡の中で地禄神社周辺は、調査が進んでいるとはい難い地点である。今回調査により、少なくとも弥生時代後期には、集落が広がっていたことが明らかになった。従来から井尻B遺跡では、弥生時代後期に至って、特に南半部を中心に大規模な集落が突如として形成される様相が見られたが、今回のように弥生時代後期遺構のみが検出される地点は、その様相を顕著に示したものといえよう。更に周辺の調査に期待したい。

井尻B遺跡10次調査



調査地点図

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1997年11月25日付で、清水紘一氏より、専用住宅建設予定地の埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが提出された。申請地は福岡市の周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻B遺跡内に位置していることから、埋蔵文化財課では審査願いを受けて、12月4日に試堀調査を行った。その結果申請地内には遺構、遺物が認められた。この成果をもとに、申請者と埋蔵文化財課との間で保存に関する協議を持ったが、遺構面が浅く、基礎による破壊は避けられないため、建築予定地全体に対して発掘調査による記録保存を図ることとなった。調査は国庫補助により、1997年12月17日から1月24日にかけて行った。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 町田英俊（調査年度） 西憲一郎・生田征生（整理年度）

調査総括 埋蔵文化財課 課長 荒巻輝勝（調査年度） 山崎純男（調査年度）

第二係長 山口譲治（調査年度） 力武卓治（整理年度）

調査事務 埋蔵文化財課第1係 河野淳美（調査年度） 文化財整備課 御手洗潔（整理年度）

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 野村道夫 楠林司朗 森田祐子 古賀典子 持丸玲子 緋川ゆかり 石川洋子

鍋山春子 坂本俊子 穴井加奈子 馬目真吏

整理作業 林由紀子 大石加代子

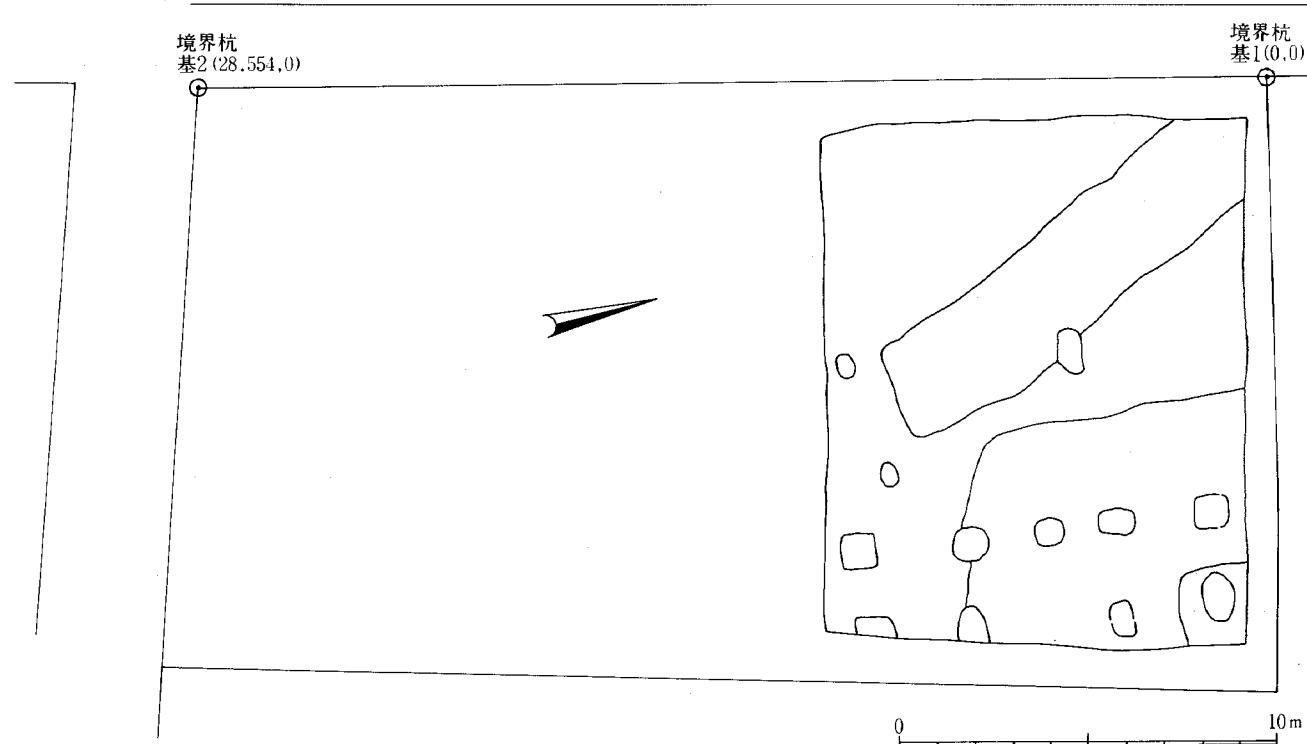


Fig. 4 調査区位置図 (1:200)

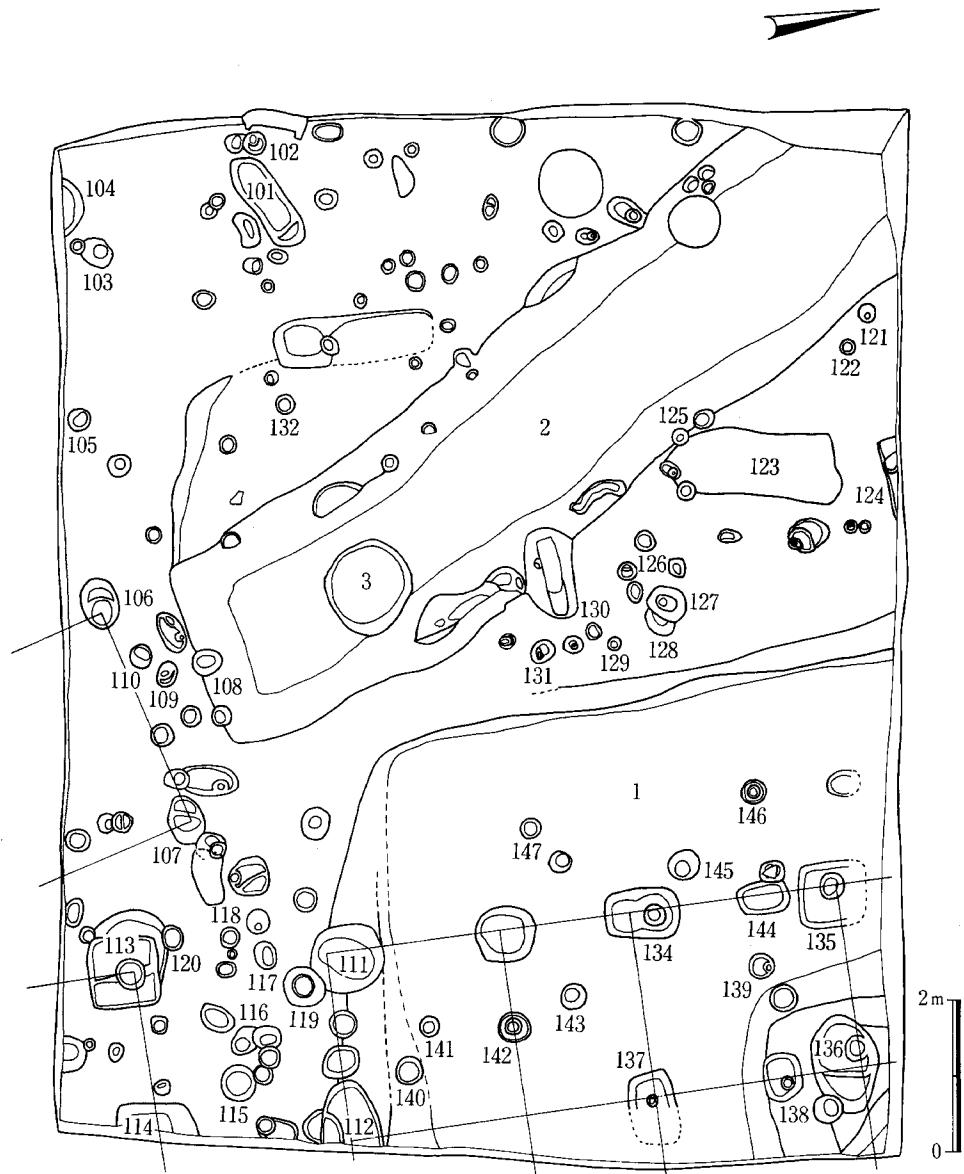


Fig. 5 遺構配置図 (1:100)

遺跡調査番号	9758	遺跡略号	IZB-10		
遺跡地番	福岡市南区井尻1丁目27-13				
開発面積	448.51m ²	調査対象面積	153m ²	調査面積	153m ²
調査期間	1997年12月17日～1998年1月24日		分布地図番号	25-0090	

なお、調査中に、建築担当者より、調査区内には深い遺構が多く、建物の基礎の構造に影響が大きいとの指摘を受け、協議の結果一部の遺構（溝1）については、完掘することを断念した。

II. 調査の記録

概要 10次調査地点では弥生時代の大溝、古墳時代の大溝、古代の建物などを検出している。調査面積に比して成果が大きいといえよう。特に弥生時代の大溝は、環濠の陸橋部にあたる可能性がある。従来後期に比べて今一つ様相が不明であった井尻B遺跡の中期を考えるうえで、重要な資料を提供したといえよう。また溝1、溝2の最上層を中心に、遺構の上場を超える範囲で、古代の遺物を含む層が広がり、この層を切って古代の建物の柱穴が掘り込まれている。古代の整地層と考えられる。

1. 検出遺構

溝1 (Fig. 6) 調査区北東端で検出した。調査区の約1/3を占める遺構である。幅5m程を測り、L字状に屈曲する。溝2とは方向を異にする。覆土は、最上層には粘土ブロックを含みよくしまった層があるが、これは調査区の広い範囲に見られる古代の整地層である。その下層は全体的にしまりがない。その形状からは方形周溝墓の周溝か、方形の区画溝を持つ居館跡などの可能性が考えられる。出土遺物中最も多いのは弥生時代中期土器であるが、各層にわたって図示したような古墳時代前期の遺物が見られるので、該期に属する遺構と考えられる。

溝2 (Fig. 7) 調査区西側を北西から南東に伸びる溝である。調査区内ではほぼ直線である。断面はV字ではなく台形で、床面は比較的広く平坦である。検出面からの深さは1.2m程である。調査区南端で立ちあがる。調査区内での延長は11mを測る。注意されるのは溝の立ちあがりに隣接して、ほぼ直交して2基の柱穴が並ぶことである。これらのことを考え合わせると、溝2は環濠の一部であり、この立ちあがりは陸橋部をなす可能性が強い。したがって隣接する柱穴は門状の遺構となるものと考えられる。後述する出土遺物からは、弥生時代中期中頃から後半を主体とし、中期末までには埋められていると考えられる。

土壙3 (Fig. 7) 溝2の床面で検出した。溝2の端部付近に位置する。径1.2m程の円形を呈する。溝2床面からの深さ1.5mを測る。当初その検出状況からも、土層の堆積状況からも溝2に先行する井戸と考えた。しかし出土遺物の整理の段階で、相当量の遺物が、溝2と土壙3で接合した。すなわち埋没時には時期差がなかったと考えられるのである。従って、少なくとも生活用水を得るために溝底へ降りていくのは不自然であり、日常用の井戸とは考えがたい。ただ、生活用水ではなく、環濠の機能にかかわる水源である可能性はあるかもしれない。具体的にそのような例があるか、今のところ寡聞にしてわからないが、一応土壙として報告しておき、類例を待ちたい。

土壙4 (Fig. 7) 溝2の東側で検出した。長楕円形を呈し、長1.2m、幅60cmを測る。検出面からの深さは70cmを測る。断面台形を呈し、床面は狭い。溝1とほぼ同時期の土壙である。性格は不明。

掘立柱建物1 (Fig. 8) 調査区東端で検出した。3間×2間以上の総柱建物と考えられる。柱穴は

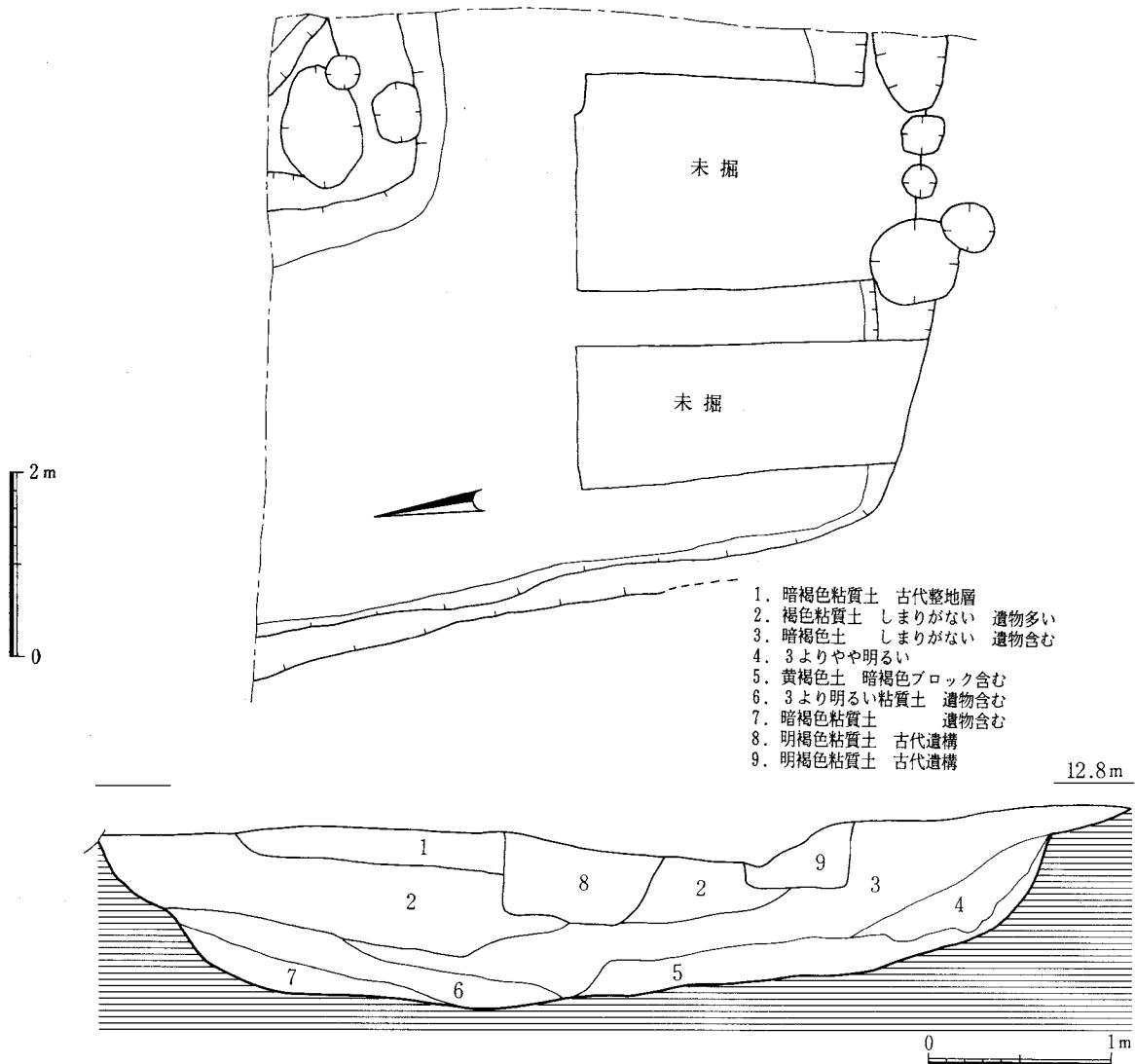


Fig. 6 溝1実測図 (1:80)

ほぼ方形に近い。柱痕跡は径15cm程である。この建物は古代の整地層を切って建てられている。この層の上にはこの建物のほかにも柱穴が見られる。またこの整地層には井尻廃寺のものと考えられる瓦も含まれており、寺の廃絶後の建物である。

掘立柱建物 2 (Fig. 8) 調査区南東端で検出した方形の2基の柱穴は、ほぼ掘立柱建物1と柱筋が通るが、柱穴間の距離が掘立柱建物1より若干広いこと、軒と考えるには身舎より大形の柱というのに違和感があることなどから、一応別の建物と考えた。別の建物とすれば、陸橋の真正面に位置することになり、弥生時代の物見櫓的建物ではないかとも考えられる。掘方は1辺1m程を測る方形で、柱痕跡は30cm程である。

2. 出土遺物

出土遺物は総量でコンテナ20箱程度である。遺存度は総じて悪く、表面はかなり摩滅している。

溝1出土遺物 (Fig. 9) 1は布留式の甕である。口縁端部内面はわずかにくぼむ。肩はなで肩である。内面は削り、外面は荒れているが、ハケメと思われる。2は小型丸底壺であるが、底部は厚さを増し、剥離痕があるため、脚がついていたものと考えられる。口縁部は直線的に広がり、端部を薄く仕上げる。3は二重口縁壺である。器壁は厚手で、口縁端部は坦面を持つ。4は大形甕の頸部である。

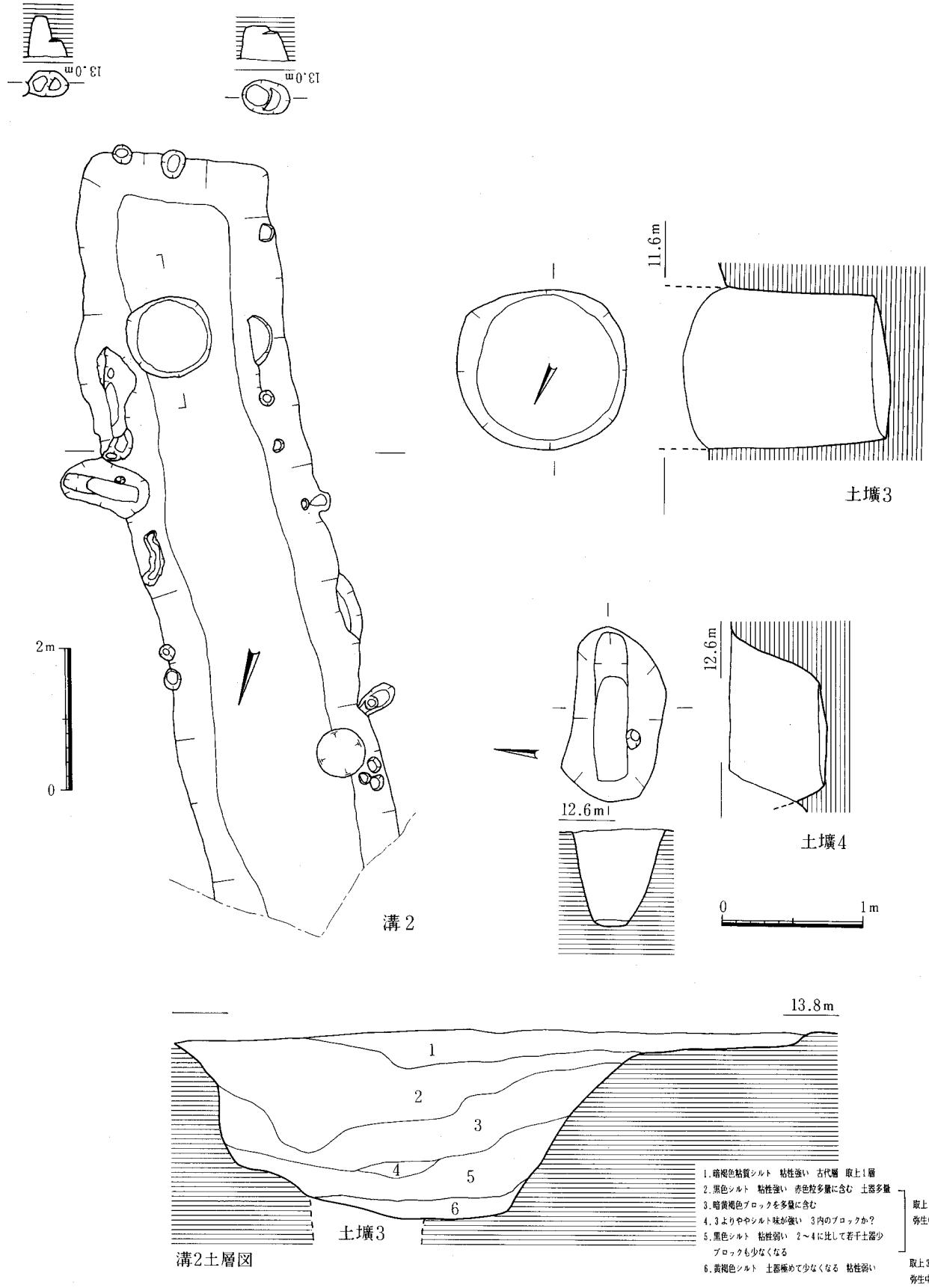


Fig. 7 溝2、土壤3、土壤4実測図 (1:80、1:40)

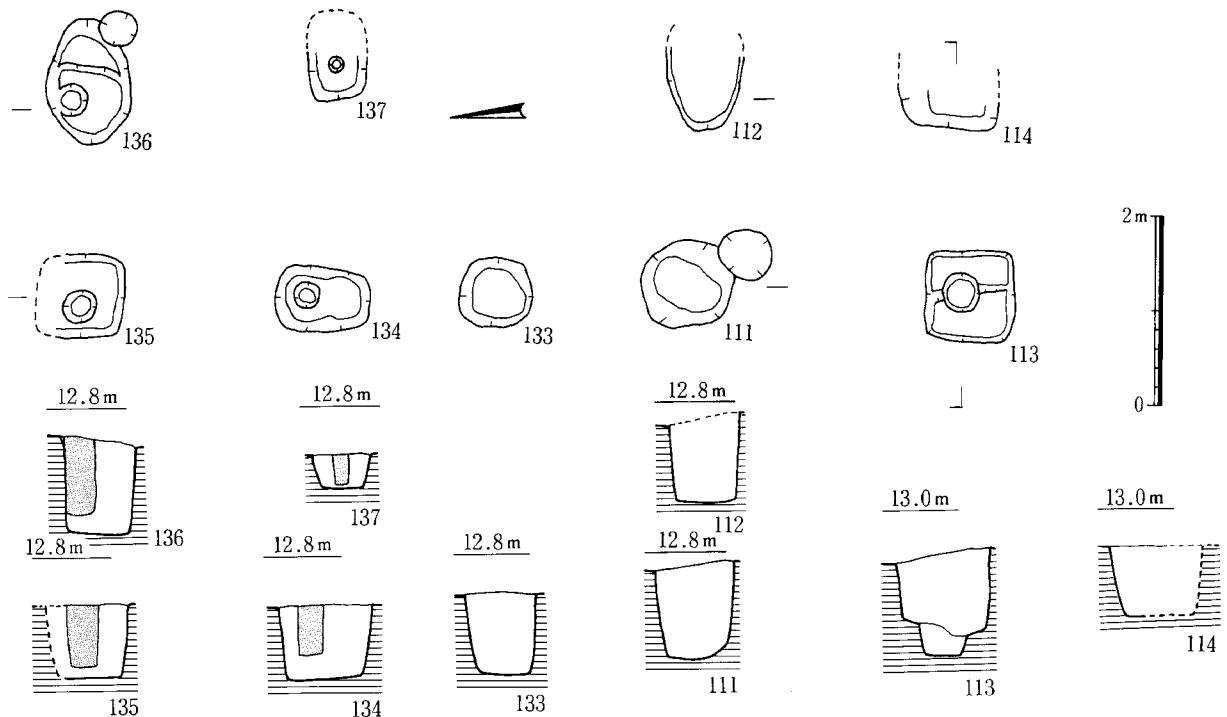


Fig. 8 掘立柱建物実測図 (1 : 80)

う。器壁はかなり厚い。頸部付け根に太い突帯をめぐらし、逆V字の刻みを施す。6は大形壺の底部である。底部は小さな平底を呈する。5は弥生土器の甕である。

溝2出土土器 (Fig. 9~12) Fig. 9の7、30、31は蓋形土器である。7は平坦な頂部からくびれずにそのまま広がる。端部に穿孔する。30は短い筒部を持って大きく広がる。頂部はややくぼむ。外面はハケメ。31は紡錘形の頂部を持つ。くびれ部は横ナデを施して、ハケメを消している。

11、26は器台である。11はやや下端が開く器形を呈する。外面は縦方向のハケメ、内面下端に横方向のハケメを施す。26は調整をナデ消しており、内面に板状工具によるナデのため、中位に稜が立つ。

24、27は小形の脚付土器の脚部である。24は端部に坦面を持ち、外面に丹塗を施す。27は低く開く脚部である。

Fig. 10の9は高壺の壺部。口縁部は鋤先状を呈する。やや深い器形である。外面は丹塗。12も高壺の壺部である。口縁部は鋤先状で、内側に強く張り出す。丹塗の痕跡が見られる。内外とも丹塗りか。16は比較的浅い器形である。器面かなり荒れるが、内外とも丹塗と考えられる。29はやや薄手の精製品である。口縁部は水平の鋤先口縁で、外端部は坦面をなす。口縁部下に断面M字の突帯を巡らす。器壁がかなり荒れるが、本来外面には丹塗が施されたものと考えられる。

17は広口壺である。口縁端部を欠く。頸部付け根に断面三角の突帯を巡らす。低部はわずかに上底状をなす。口縁内面がわずかにくぼむ。18は短頸壺である。口縁部は鋤先状を呈し、上面は凸面をなす。頸部付け根は強い横ナデにより、沈線状をなす。胴部下半外面に目の粗いハケメを施す。13は頸部を欠く。胴部は肩が張る。底部付近のみ粗いハケメが残る。Fig. 11の28は広口壺の頸部から胴部の破片である。内外面に丹塗を施す。

Fig. 11は甕である。10は平坦な鋤先口縁を持つ。内面の張り出しあはない。外面に目の粗いハケメを

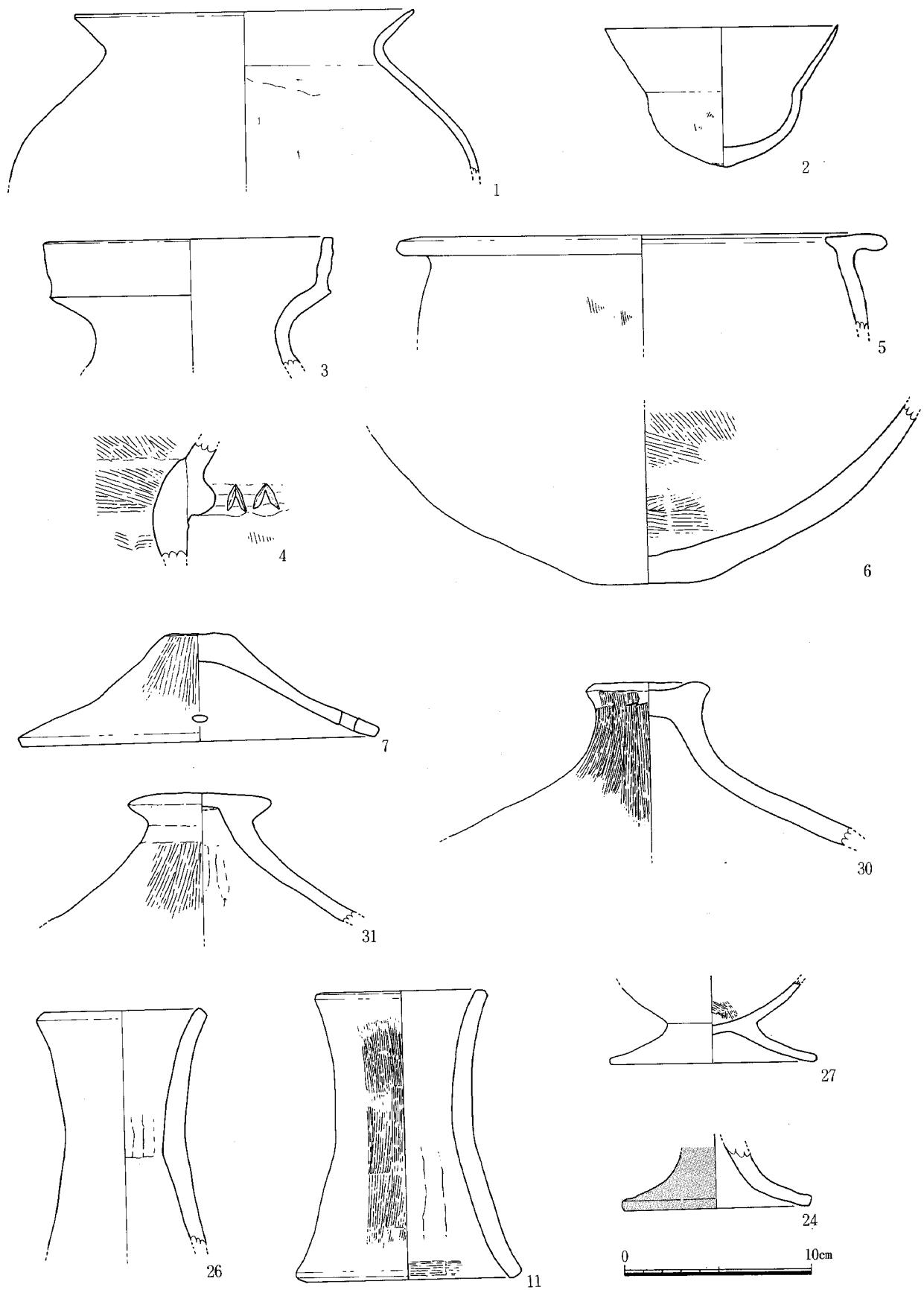


Fig. 9 出土遺物実測図 1 (1:3)

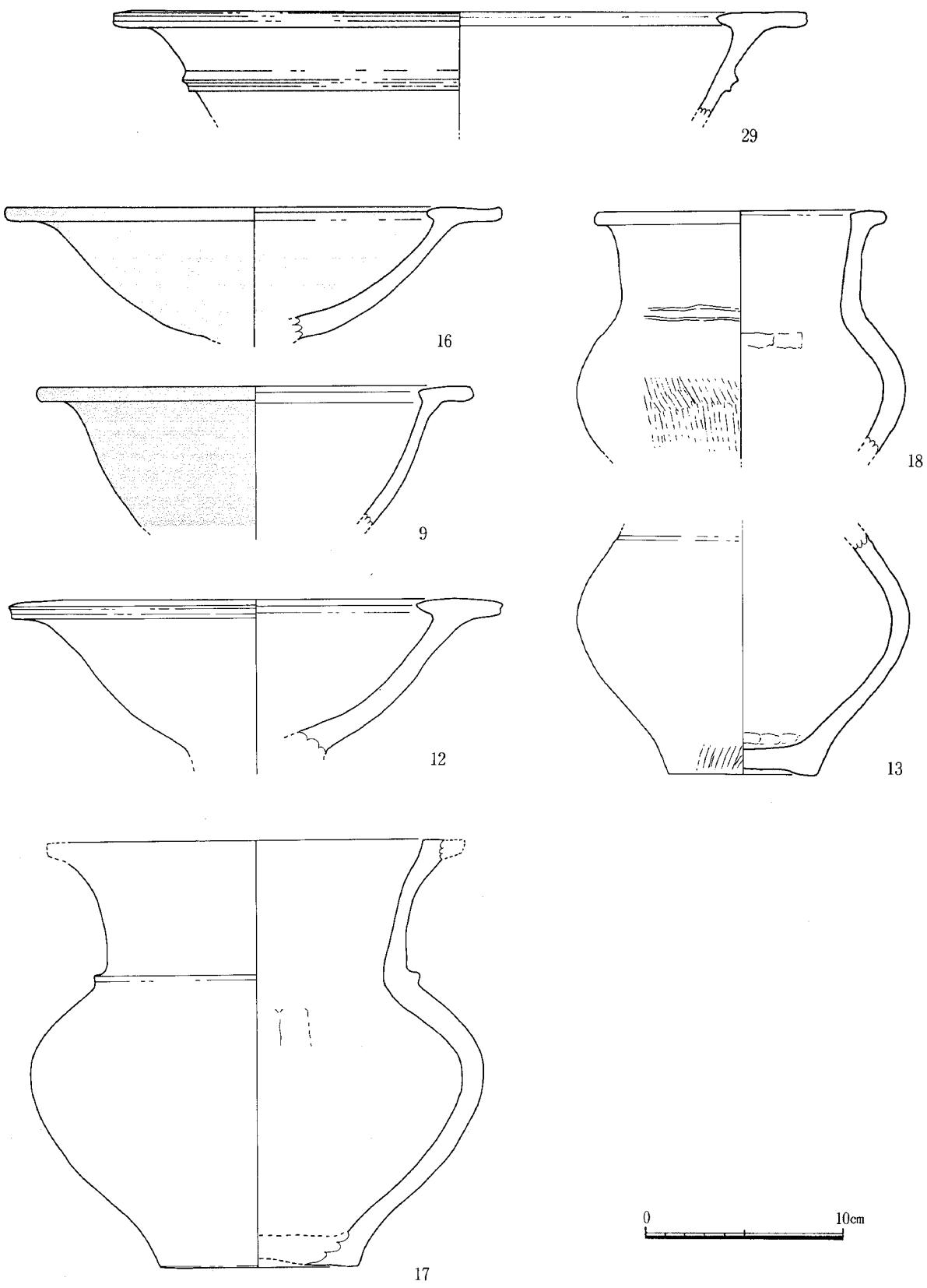


Fig. 10 出土遺物実測図 2 (1 : 3)

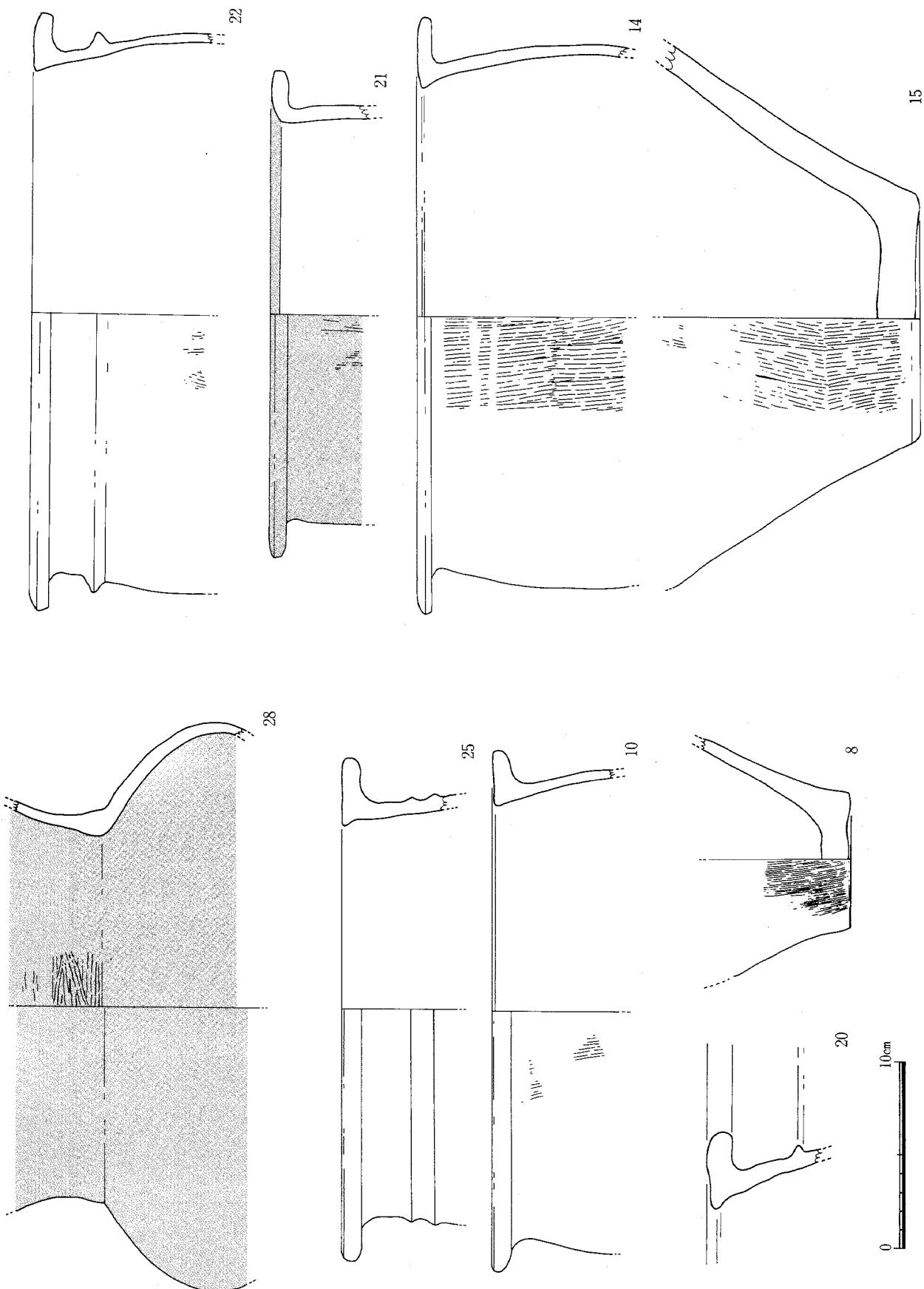


Fig. 11 出土遺物実測図 3 (1:3)

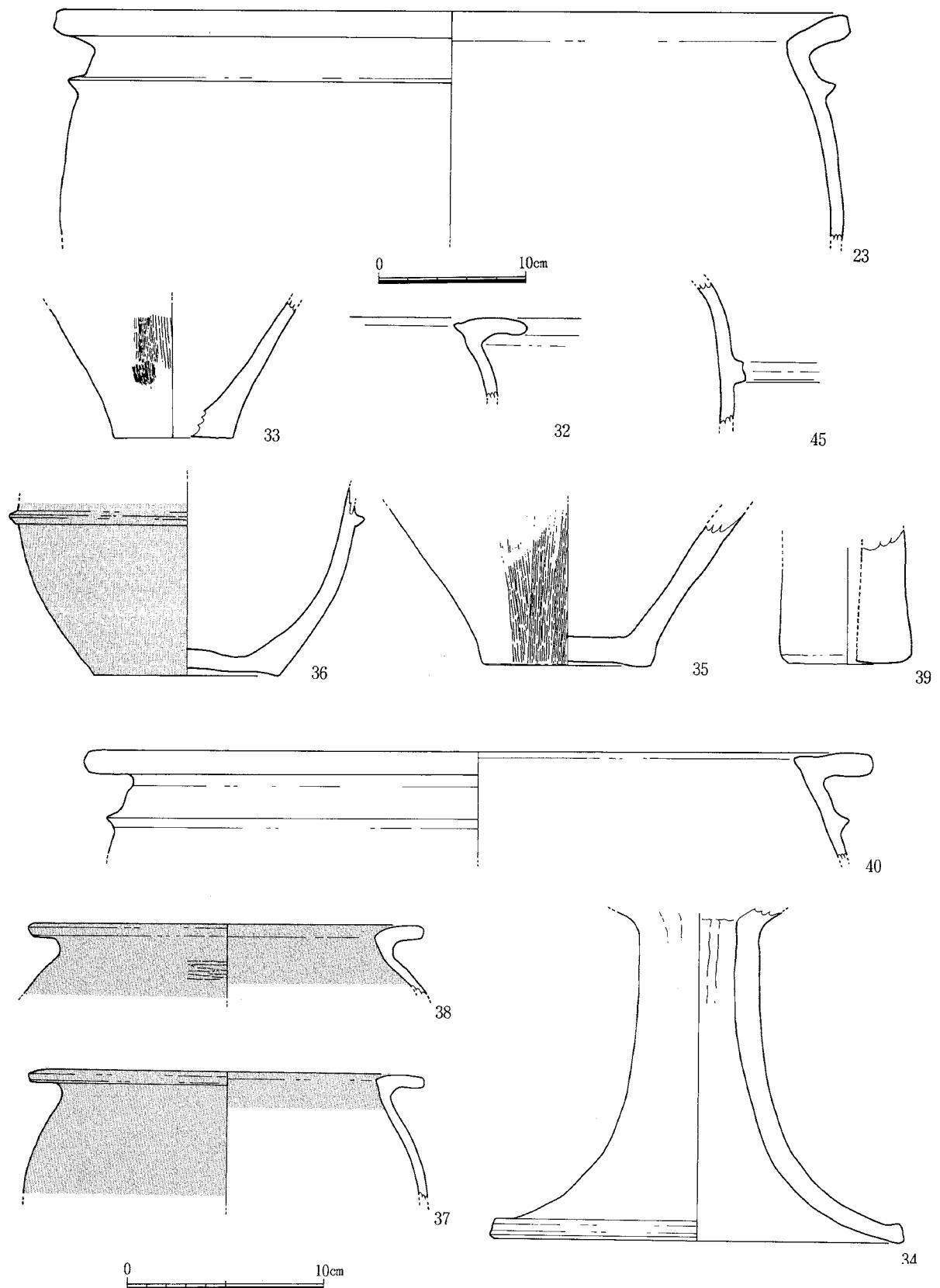


Fig. 12 出土遺物実測図 4 (1:4, 1:3)

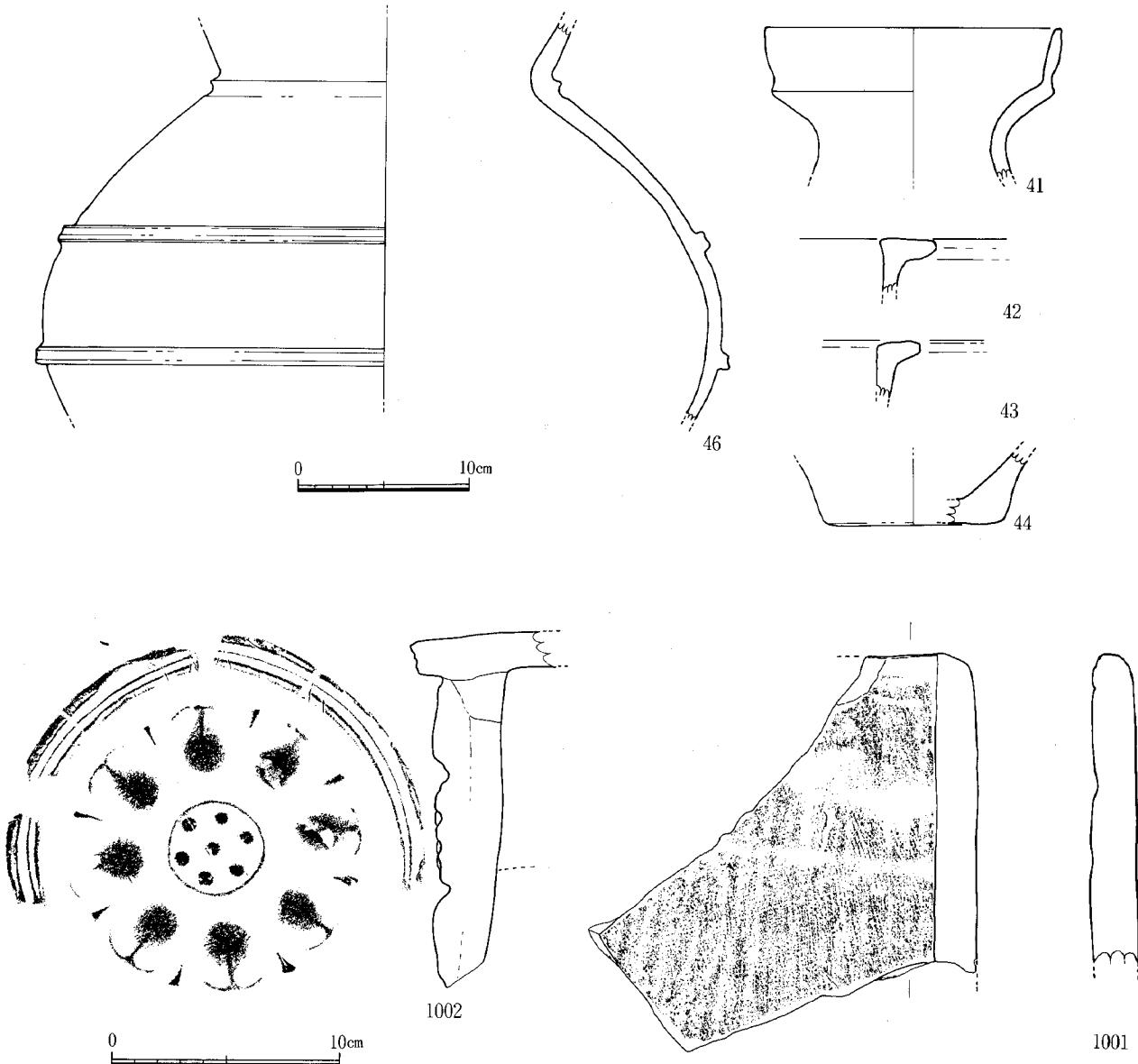


Fig. 13 出土遺物実測図 5 (1:4, 1:3)

施す。14も平坦口縁の甕。10よりは胴部の張りが小さい。外面は10と同様目の粗いハケメ。25はほぼ水平の口縁部を持つ。口縁部直下に低い断面三角の突帯を二条巡らす。20は小片であるが、口径40cm程になる大甕である。口縁部は厚い鋤先形で、端部は丸みを帯びる。若干胴部が張る。口縁部下に断面三角の突帯を巡らす。8、15は底部である。8は厚い平底で、外面は目の細かいハケメを施す。15は大形の甕で、底径12cmを測る。底部は厚い平底で、直線的に立ちあがる胴部も厚い。外面は粗いハケメ。Fig. 12の23は大形の甕である。復原口径54cmを測る。口縁端部は坦面をなし、口縁は内傾して「く」字形になる。内面の稜は甘い。口縁部下に断面三角の突帯が一条巡る。以上は溝2の2層出土である。

Fig. 12の32、33、45は溝2の3層出土土器である。32は甕の口縁部片。わずかに端部が下垂する鋤先口縁で、胴部が若干張る。33は底部、外面はハケメであるが、目の粗密が異なる2種の原体が認められる。45は瓢形土器か。断面M字の突帯が巡る。

土壤3出土土器 (Fig. 12, 13) 34、35は溝2の2層と土壤3の出土遺物が接合したものである。34は高壇脚。脚端部は坦面をなす。太い円柱部から裾が大きく広がる。35は甕底部。厚い平底で、外面

はハケメを一部ナデ消している。

36～40、46は土壙3出土である。36は樽形を呈する甕である。胴部中位に断面三角の高い突帯を巡らす。外面は丹塗と思われる。37は小形の甕。外面から口縁内部にかけて丹塗である。38は無頸甕である。内外丹塗。39は支脚である。厚い筒形を呈する。40は大形甕。口径40cmを測る。Fig. 13の46は甕である。頸部がしまり、肩はなで肩である。頸部付け根に断面三角、胴部に断面M字の突帯を二条巡らす。胴部最大径40cmを測る比較的大形品である。

土壙4出土土器 (Fig. 13) 41は土師器の二重口縁甕である。屈曲からわずかに開きながら立ちあがり、端部は丸く收める。

柱穴・その他の遺構出土土器 (Fig. 13) 42はピット106出土の甕片である。43は同様にピット107出土。44はピット114出土の底部。いずれも弥生土器である。1002は整地層出土の軒丸瓦である。3次調査出土例と同様百濟系の単弁瓦である。1001は平瓦である。凹面に布目が見られる。1001のように凸面をナデ消すもののほか、凸面に格子目叩きを施すものが見られる。

3. 小結

今回の調査は面積が非常に狭いものの、多岐にわたる問題を提起したといえよう。まず、井尻B遺跡で初の検出となる、環濠と思われる溝の発見がある。断面はV字にはならないものの、深さ、幅は環濠として遜色ないといえよう。環濠は陸橋や入り口施設（門）を持つと考えられ、物見櫓的な建物が付属する可能性もある。かなりの規模の集落が中期段階に成立していたことを物語っていよう。調査時期その他の関係で陸橋の具体相や門の構造などは調査することができなかつたが、他日を期したい。また、古墳時代の大規模な溝も検出されており、方形周溝墓などの古墳時代遺構があったこともうかがわれた。このほか、古代の大形建物も注目される。これに類似する建物跡は最近の井尻B遺跡第17次調査でも検出されており、その範囲や規模が注目される。井尻では古瓦の出土が古くから知られており、「寺」とかかれた刻書須恵器も出土している。筆者はかつて「井尻廃寺」と仮称した寺跡を想定したが^{註1}、瓦の分布範囲はそのときの想定からかなり広がっている。先述した井尻B遺跡第17次調査ではやはり瓦を包含する溝が検出されているという。現在井尻B遺跡では遺跡をほぼ縦断して通る道路建設に伴う調査が行われており、今後の調査の進展に期待できる。

^{註1} 井尻B遺跡2 福岡市埋蔵文化財調査報告書第411集 1995

図 版



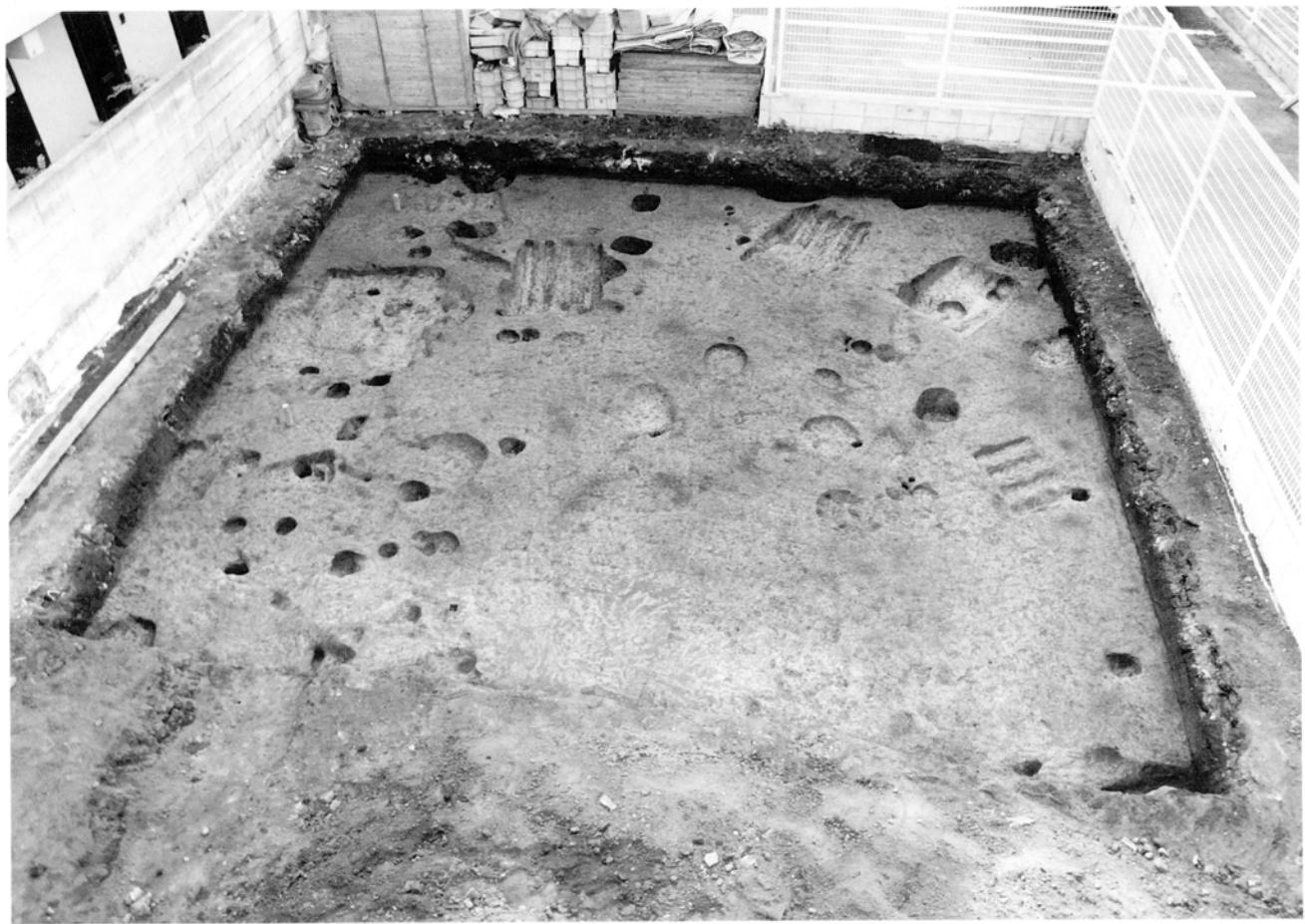
(1) 住居跡 1 (東から)



(2) 北半区全景 (南から)



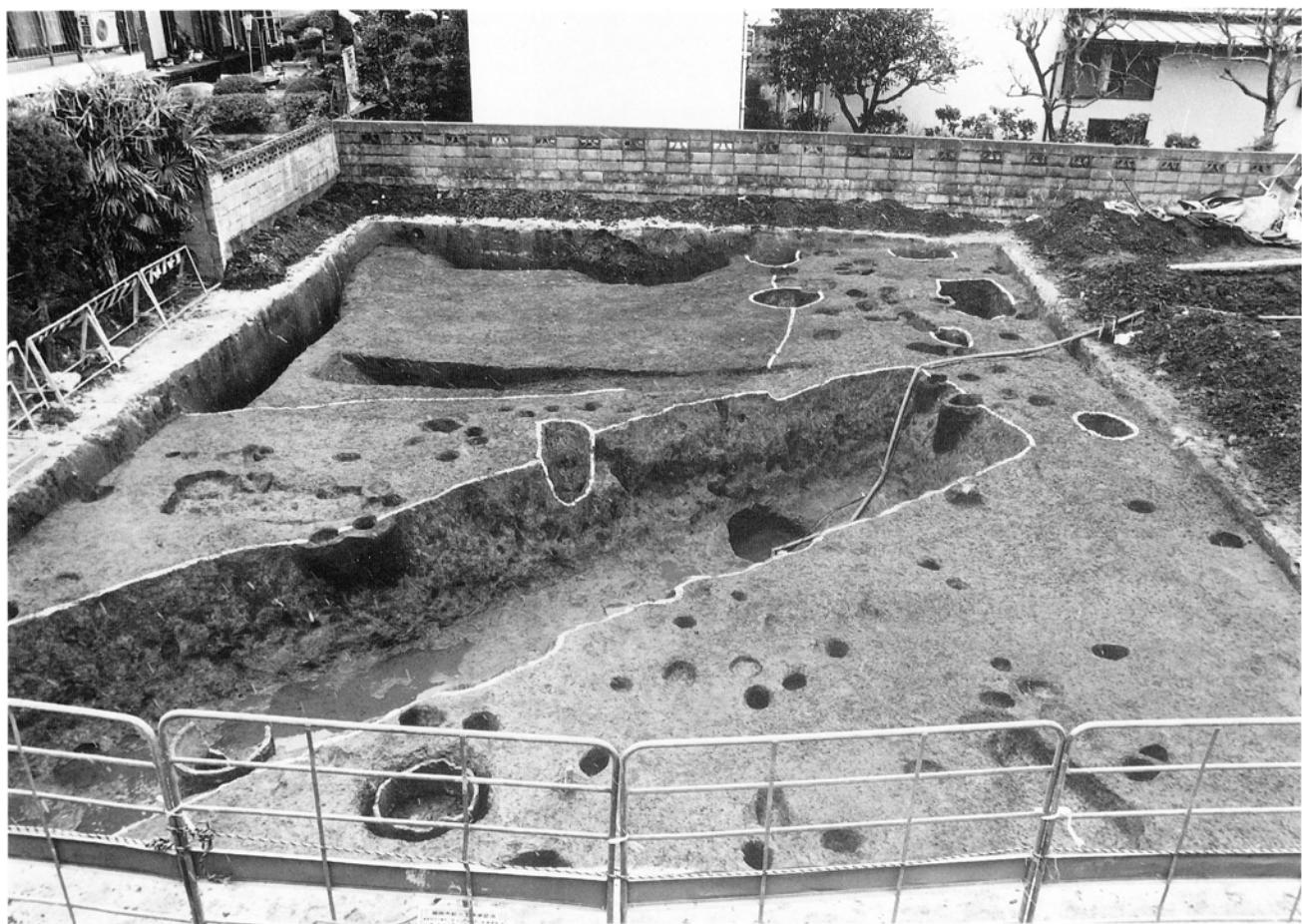
(1) 堀立柱建物
(東から)



(2) 南半区全景 (北から)



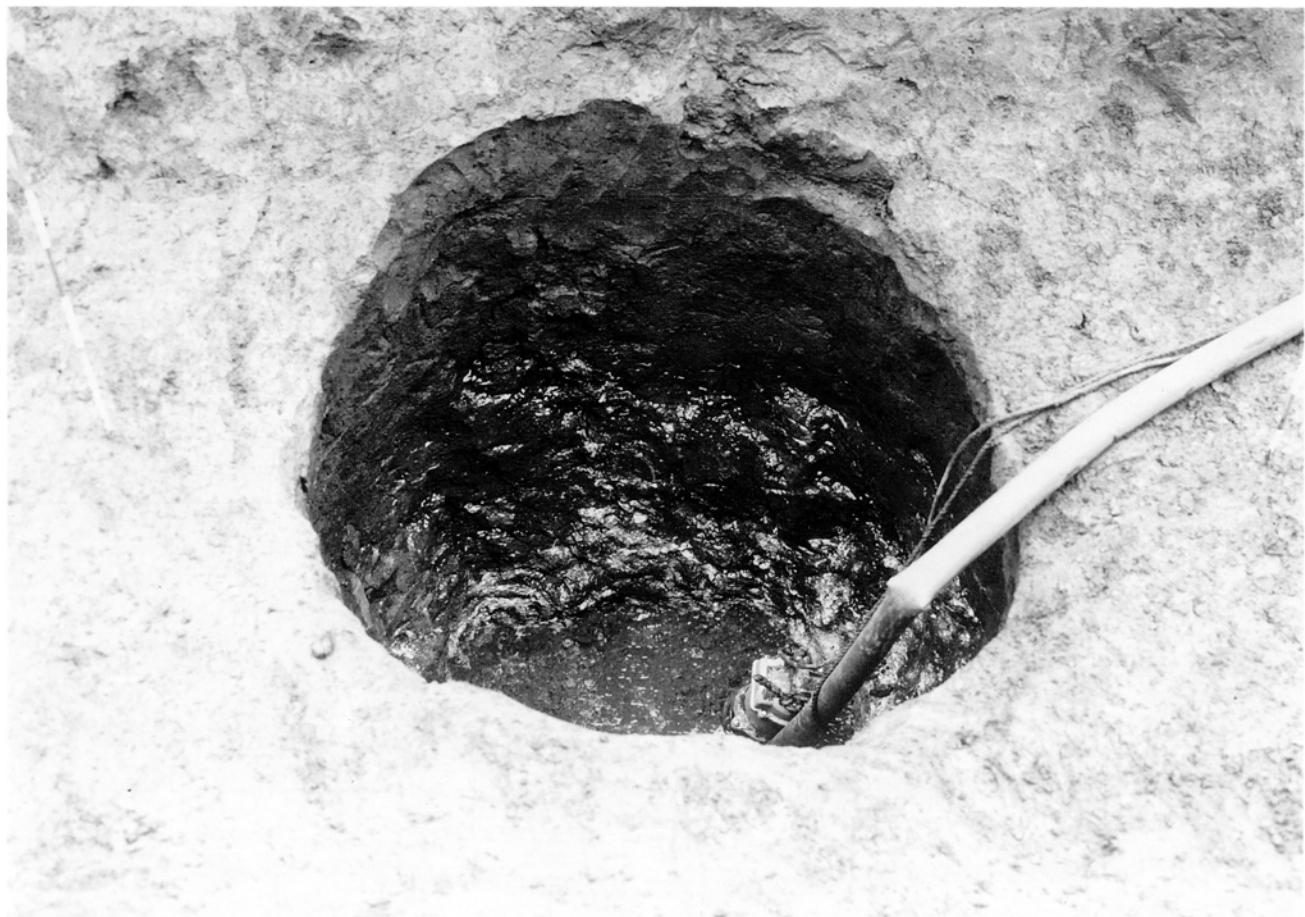
(1) 溝2（南から）



(2) 全景（西から）



(1) 溝2 土層（北から）



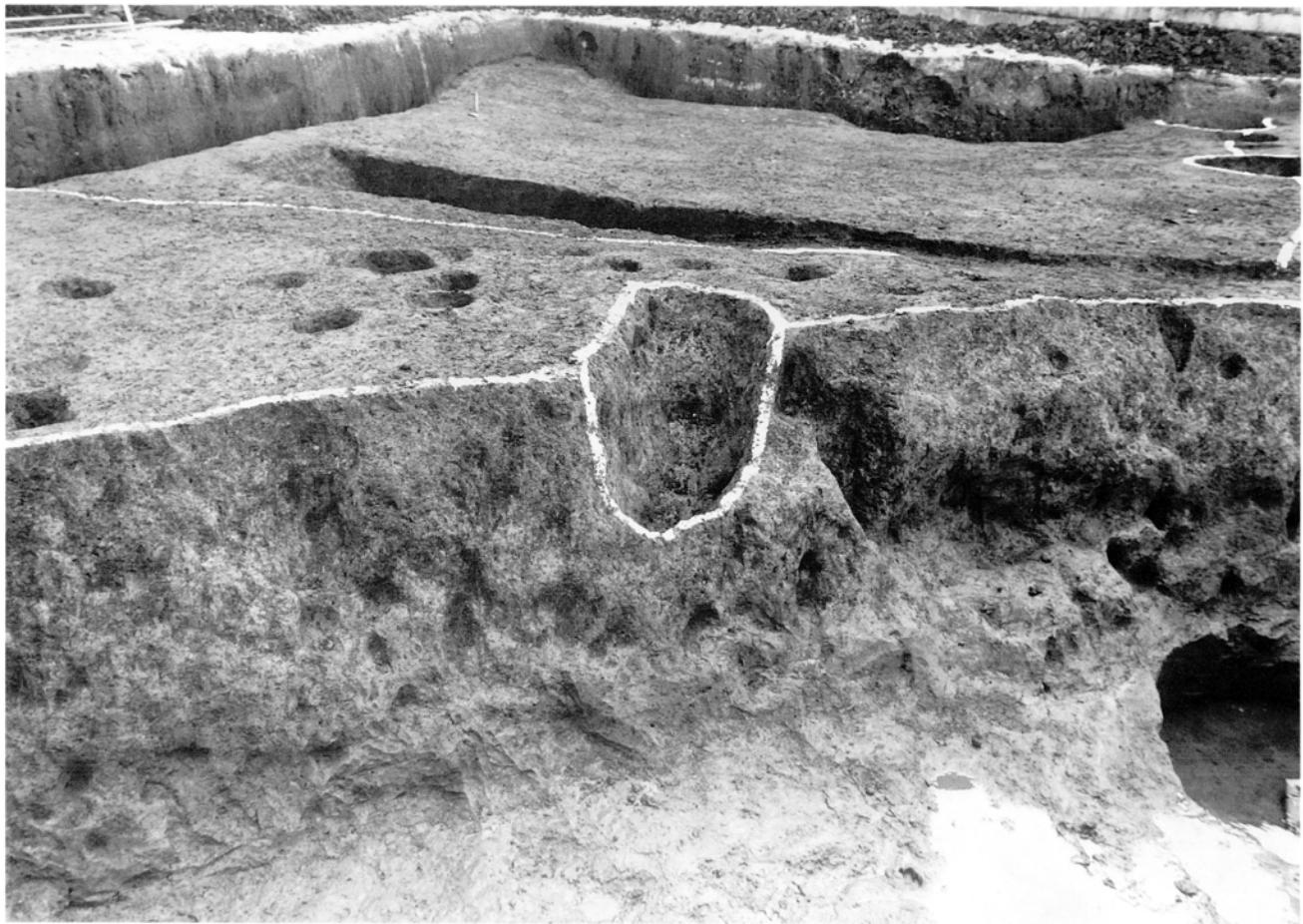
(2) 土壌3（西から）



(1) 堀立柱建物 1、2
(南から)



(2) 堀立柱建物 1 (西から)



(1) 土壌4 (西から)



(2) 溝1 (西から)



(1) 溝1北壁土層（南から）



(2) 溝1東壁土層（西から）



(1) 門状遺構・堀立柱建物 2
(南から)



(2) 柱穴135土層



(3) 柱穴114土層

井尻遺跡群9

—第9・10次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第678集

2001年3月15日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印 刷 (株)川島弘文社
福岡市東区箱崎ふ頭6-6-41

